



Title	退官に当たって
Author(s)	三石, 明善
Citation	大阪大学低温センターだより. 1989, 66, p. 1-1
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/3862
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

退官に当たって

三石 明彦

昭和52年度から低温センター運営委員になり今日まで吹田分室を中心に運営にかかわってきたが、実際のかかわりは昭和40年頃からで、工学部にもヘリウム液化機を導入しようという概算要求を行うことになり、吉永先生（現名誉教授）に必要な機器のリストアップと費用の概算、液化室のプランなどの原案作りをさせられたときからである。たしか2年目で要求が認められ、工学部の吹田移転と共に昭和44年4月に現吹田分室の液化機まわりの建物が完成している。記録によると、同年7月からヘリウム液化が始まり、初年度は約300ℓとなっている。昭和57年にはそれが10,000ℓの大体に入り、最近また増加の傾向にある。低温センターの最重要な業務は、学内の研究者に寒剤を滞りなく供給することである。この点に関し、吹田地区は蛋白研予算の液化機を設置していることで今の所はなんとかできているが、豊中地区は液化機の老朽化もあり需要に応えられなくなり、大型液化機の要求を行っている。残念ながらまだ実現に至っていないが、基礎研究推進の立場からも重要なので、関係諸方面の御理解と御支援をお願いしたい。

低温センターの業務はこのほかにもあり、吹田地区を例にあげると、設立のときから共同利用センターの考えがあり、低温実験室の増築、超伝導マグネットや小型冷凍機の共同利用、低温脆性試験機室の設置などが行われてきている。

また低温技術サービスということで、低温関係の技術相談、新たに低温実験を始める院生や若い研究者に対する講習会などを毎年行っている（毎年50人位参加）。大学は教育機関でもあるので、このような低温技術サービスも重要である。また現在まで3人の中国人留学生をセンターで研修させている。これらのサービスはセンターに優れた低温の研究者、技術者がいて始めて行えることで、これらの職員は低温工学関係の自主技術の開発にも努力し成果をあげてきている。私自身は具体的には吹田地区のセンターしか知らないが、少ない人員でこれらのサービス業務を定常的に行ってきたセンター職員の努力に対し感謝の念で一杯であると共に、センター長在任中これらの業務をより充実させるためのいろいろな夢をかなえられなかったことを申し訳なく思っている。今後ともセンター関係者と利用者が一丸となって、ますます大阪大学低温センターの充実と発展に向かわれることを祈念してやまない。最後に、吹田地区の低温センターの実地の責任者として、創意工夫と献身をもって長い間その改善と充実に当たられた山本純也氏（現京大ヘリオトロン核融合センター助教授兼阪大超伝導工学実験センター助教授）に心から感謝の意を表明したい。